150年ぶりに蘇った

銅屋根が輝く大船鉾（おおふねほこ）

エンヤラヤー、音頭取のかけ声が力強く町中に響き渡る。ここは、京都の祇園祭。6万人を超える観衆が昨年約150年ぶりに復興を遂げた「大船鉾（おおふねほこ）」に熱い視線を注ぐ。全長7.5m、高さ6.3m、重さ12トン。迫力ある外観に思わず息をのむ。祇園囃子（ばやし）の音を従えて、長い眠りから覚めた大船鉾がゆっくり、ゆっくりと姿を現した。

3度焼失した悲運の山鉾「大船鉾」

日本三大祭と称される祇園祭は、平安時代前期から1100年以上続く八坂神社のお祭りである。毎年7月に約1か月行われ、様々な行事が市内各所で行われる。そのなかでも、ひときわ注目を集めるのが「山鉾巡行（やまほこ）」である。山鉾とは、江戸時代から伝わる飾り「懸装品（けそうひん）」で彩られた山車（だし）のことだ。山鉾巡行は「前祭（さきまつり）」と「後祭（あとまつり）」の2日間に分かれ行われ、各町に伝わる32基もの山鉾が四条通から河原町通を練り歩く。その山鉾のなかでも、後祭の最後尾「しんがり」を務めるのが大船鉾である。祇園祭山鉾巡行の大トリを飾る重要な山鉾だ。

この大船鉾は、これまで3度も焼失した悲運の山鉾である。建立されたのは室町時代の1411年。その56年後、1467年応仁の乱で焼失し、1788年の天明の大火でも焼失した。そのたびに町衆によって復興されてきた。そして、最後に焼失したのが1864年幕末の「蛤御門（はまぐりごもん）の変」である。蛤御門の変とは長州藩が京都での地位を奪還するため、幕府に戦いを挑んだ事件のことで、激しい戦いのなかで大船鉾の船体や車輪、竜頭の飾りなどが焼け落ちてしまった。

音頭取のかけ声が京都の町に活気をもたらす

復興の機運を高めた町衆の熱意

それから約150年間、祇園祭の山鉾巡行は大トリ不在のまま行われることとなった。大船鉾はなぜ今、復興することができたのか。

復興に向けて大きな足がかりとなったのは、2009年に山鉾行事がユネスコの無形文化遺産に登録されたことだ。それに伴って、京都市の無形文化遺産のメイン展示として、大船鉾のレプリカを作るという話が持ち上がった。これに対し市民は「レプリカではなく本物を！」と強く要望した。大船鉾はこれがきっかけとなって復興へと動き出したのである。

復興には数億円を超える資金が必要であった。しかし、復興を進めた四条町大船鉾保存会は「祇園祭は町衆の祭」という信念を貫き、大企業に協力を求めなかった。市民に復興への思いを伝え、寄付を呼びかけたのである。市民もこの熱意に応じて多額の寄付が集まることとなった。さらに、数千万円かかる船体と屋形は、青年会議所と京都の慈善団体が設立60周年事業として寄贈し、大船鉾の裾幕や音頭取の衣装は、京都市立芸術大学がデザインを手がけた。市民の熱い思い、地域の協力によって大船鉾の復興は成し遂げられた。

121点もの懸装品が2007年に有形民俗文化財に指定された

山鉾巡行最大の見せ場「辻回し」割竹を車輪の下に入れ方向転換する

40人ほどの曳手が全体重をかけて綱を引いていく

山鉾巡行の妨げとなるため信号の向きを90度変える

銅を駆使して150年前の大船鉾屋根の再建に挑む

市民の期待を一身に受け、復興した大船鉾。大船鉾の頭上で美しく輝いているのが、銅製の屋根である。「大船鉾の復興を手伝わせてもらえるのは、とても光栄なことでした」過去を振り返りこう語るのは銅板屋根の製作を担った、(有)田原板金製作所　代表取締役の田原氏。同社に屋根の再建の話が舞い込んだのは、2012年のことだった。四条町大船鉾保存会が大船鉾の調査を行ったところ、屋根は銅板で葺かれていたことが分かった。そして京都で板金製作の高い技術力を誇る同社に、大船鉾屋根再建の依頼がきたのだ。

大船鉾は全部で20ものパーツで構成されている。それぞれ釘を使用せずに組み立てるため、精巧な技術が必要とされた。また、一文字葺き屋根の美しさを追求するため、保存会から「接合部に被せものを使用せず製作して欲しい」との要望を受けた。パーツの接合部に施す雨仕舞は難易度が高いため、設計士と何度も議論を重ね、接合部の美しさと雨仕舞の機能性の両立を実現させていった。田原氏は「長年の経験を生かし、この難題をクリアすることができました」と、誇らしげに語る。

しかし、現在の大船鉾はまだ完全なものではない。これから数十年かけて完全なものにしていく。来年は、蛤御門の変で焼失した竜頭の飾りが新調される予定だ。市民の協力で一歩一歩本来の姿を取り戻していく大船鉾に、まだまだ目が離せない。

一文字葺きで葺かれた大船鉾の銅板屋根

20分割されたパーツの1つ

銅板を貼る前に防水処理を施す

(有)田原板金製作所
代表取締役
田原 広美氏

板金技術を未来へつなぐ 京都府板金工業組合の取り組み

伝統技術が息づく町、京都。なかでも板金技術は長い歴史と伝統を誇る。この伝統技術を後世に残そうと、「京都府板金工業組合」では、様々な取り組みを行っている。

例えばミニチュア鉾の製作だ。この秋開催される「京都ものづくりフェア」に向けて、組合の青年部30人ほどで山鉾の4分の1サイズのミニチュアを製作している。

このミニチュア鉾はなんとオール銅製である。これらの取り組みや若手を対象にした「技能講習会」などを通して、板金技術がこれからも京都に深く根付いていくよう若い世代への技術の継承を積極的に進めている。

オール銅製鉾のミニチュア（上）、彫金による絵付け（下）